

33 アートの会 5 月度 観賞会 報告

日時 ; 5 月 21 日 水曜日 10:00 現地集合

場所 ; 京セラ美術館

参加者 ; 庄司、田中、清水、小林猛、榎本、岡田、天王寺谷、吉田、稲垣、光長、辻井、山崎、安居院 (記) 計 13 名



モネ睡蓮のとき

晩年のモネの絵が見られる展覧会。阪急組 4 名、J R 組 9 名、合計 14 名が参加した。混雑していた。

休みがてらに、映像展示の場所がありそこでの映像を見ていると、白いひげのおじいさんが、ひたすら絵筆を動かしている。それを見ると絵を描くことが楽しみであったことがよく伝わってくる。

最愛の妻の死に顔までスケッチした人なのだ。

でも、決して幸せいっぱい的人生ではなかったことが、この展示会でよくわかった。目の病気とも戦いながら描いていたのだ。

1. 「モネ 睡蓮のとき」 鑑賞

10:00-11:30



ロンドンの橋の絵。チャリングクロス橋から始まった。

優しい感じの絵に心が休まる。

この睡蓮もしっかりと描かれていた。喜びが伝わってくる。

水と花々の装飾

装飾芸術がかつてない隆盛を見た19世紀末のフランスでは、多くの画家たちが装飾画の制作に取り組みました。モネもその例外ではなく、彼が初めて本格的な装飾画を手掛けたのは、1870年代の印象派時代にさかのぼります。やがて、1890年代を通じて連作の展示効果を追求する中で、睡蓮という一つの主題のみからなる装飾画の構想がその心に芽生えます。1909年の「水の風景連作」展以降、のちに白内障と診断される視覚障害の兆候や最愛の妻の死をはじめとする不幸は、モネの画業に一時の空白期間をもたらしました。しかし1914年に再び創作意欲を取り戻すと、かつて抱いた装飾画の構想に精神的に取り組みはじめます。当初は睡蓮のみならず、池の周囲に植えられた多種多様な花々をもそのモチーフとして想定していたのでしょう。大の園芸愛好家であったモネは、さながらカンヴァスに絵具を置くように、その庭を色彩豊かな花々で彩りました。なかでも、実現することなく終わった幻の装飾画の計画において重要な役割を担っていたのが、池に架けられた太鼓橋の藤棚に這う藤と、岸边に咲くアガパンサスの花でした。ところが、最終的にモネはそれらの花々による装飾の考えを放棄し、壁一面を池の水面とその反映によって覆うことを選びます。



モネの絵は、植物画なので日本人にとってもなじみやすい。本当に、身の回りのすぐそばにある植物を描いているのだ。藤の花といえば日本人には最もなじみがある花であるが、先日パリのグランドモスクというイスラム教の礼拝所があるが、そこの藤が綺麗だという動画を見たことがある。藤の花は、パリでも人気があるのだ。



ジベルニーの藤はどんなものであろうか？

大装飾画への道



だんだん大きな絵を描くようになる。

そのためのアトリエをジベルニーに作る。

そして、水面だけを描くようになる。水面の中に空も雲も木々もあるのだ。勿論アクセントとしての睡蓮も。

交響する色彩

交響する色彩

モネの絵画は、その色彩が生む繊細なハーモニーゆえに、同時代からしばしば音楽にたとえられました。1921年に洋画家の和田英作が松方幸次郎らを伴いジベルニーのアトリエを訪れた際、〈睡蓮〉の近作をして「色彩の交響曲」と評したところ、モネが「その通り」と答えたという逸話も知られています。しかし、1908年ごろからしだいに顕在化しはじめた白内障の症状は、晩年の画家の色覚を少なからず変容させることになりました。悪化の一途をたどる視力に絶えず苦痛を訴えながらも、モネは1923年まで手術を拒み、絵具の色の表示やパレット上の場所に頼って制作を行うことさえあったといえます。

1918年の終わりごろから最晩年には、死の間際まで続いた大装飾画の制作と並行して、複数の独立した小型連作が手掛けられました。モチーフとなったのは、“水の庭”の池に架かる日本風の太鼓橋や枝垂れ柳、“花の庭”のばらのアーチがある小道などです。これらの作品は、不確かな視覚に苛まれる中であって衰えることのない画家の制作衝動と、経験から培われた色彩感覚に基づく実験精神を今日に伝えていきます。画家の身振りを刻印する激しい筆遣いと鮮烈な色彩は、のちに1950年代のアメリカで台頭した抽象表現主義の先駆に位置づけられ、モネ晩年の芸術の再評価を促すこととなります。



このコーナーが面白かった。

小型の画面での連作。

ここでは水面ではなく、陸の風景を描いている。

太鼓橋の連作も、どこが違うのか、同じように見える絵もあった。

この創作意欲ってすごいことだと思った。

ばらのアーチの小道から見た家の連作もあった。そこではばらの赤色が中心になっているのだろうが、水面の連作とは違う色遣いに感心する。

何が描きたかったのか、ほとんど抽象のような世界である。

でも、絵具の塗り方に変化もあり、厚塗りでもまるでゴッホのような筆遣いもあった。

でもモネには抽象画ではなく、目に見えたままを描いたのだと思う。

私にはこう見えたのだという表明である。

花の美しさ、自然のすばらしさを現したもののなのだ。

春先は、いろんな花が咲いて素晴らしい光景であろうが、冬には花がなくなっていたはず、そんな時には、モネは何を描いていたのだろうか。

さかさまの世界

「大勢の人々が苦しみ、命を落としている中で、形や色の些細なことを考えるのは恥ずべきかもしれません。しかし、私にとってそうすることがこの悲しみから逃れる唯一の方法なのです。」大装飾画の制作が開始された1914年に、モネはこう書いています。折しもそれは、第一次世界大戦という未曾有の戦争が幕を開けた同年のことでした。そして1918年に休戦を迎えると、時の首相にして旧友のジョルジュ・クレマンソーに対し、戦勝記念として大装飾画の一部を国家へ寄贈することを申し出ます。その画面に描かれた枝垂れ柳の木は、涙を流すかのような姿から、悲しみや服喪を象徴するモチーフでもありました。

モネがこの装飾画の構想において当初から意図していたのは、始まりも終わりもない無限の水の広がりや鑑賞者が包まれ、安らかに瞑想することができる空間でした。それは、ルネサンス以来西洋絵画の原則をなした遠近法（透視図法）による空間把握と、その根底にある人間中心主義的な世界観に対する挑戦であったとも言え換えられるでしょう。画家を最期まで励まし続け、その死後1927年の大装飾画の実現に導いた立役者であるクレマンソーは、木々や雲や花々が一体となってたゆたう睡蓮の池の水面に、森羅万象が凝縮された「さかさまの世界」を見出します。モネの〈睡蓮〉は、画家が生きた苦難の時代から今日にいたるまで、人々が永遠の世界へと想いを馳せるよすがともなったのです。



このしだれ柳は、涙を流すかような姿から、悲しみや服喪を象徴するモチーフであったとの説明を見て、樹皮も葉っぱも涙を流しているとしか思えないようになってしまった。

モネにも、こんな激しい感情表現ができるのだと、感動した。

また、この晩年の睡蓮もしだれ柳の影が醸し出す涙の表現に、今までとは違う悲しみの表現を見ることができた。

そして、いつも気になるのがキャンバスの生地が塗り残されている。多くは上と下の部分であるが、このしだれ柳の絵では右側や左側に塗り残しがある。

それを塗り残しというか、画家が意図した味わいとするかは見る方にゆだねられている。

私は、日本画の余白の美を、そこに感じるのだ。

だからこそ、日本人に人気があるのであろう。

2. 昼食 旬菜食健 ひな野 京都市動物園店(創作料理)のランチ 11:45-12:45

<https://www.hotpepper.jp/strJ003474192/lunch/>

ランチビュッフェコース 食事にデザート、ソフトクリームまで堪能した。 2,288円

以上